

聖母の被昇天

2015.8.15

ルカ 1・39-56

八月のこのお盆の季節、今日終戦金日に祝う聖母被昇天の祝日は、日本のカトリック信者であるわたしたちには独特の色合いを帯びた祝い日になっています。被昇天の祝日はマリア様にとって、今日の福音に響くマニフィカットの賛歌が歌い上げるように喜びに満ちた晴れがましい祝いであることは言うまでもありません。けれども、聖母のこの祝日は、地上に残されたわたしたちが天の栄光に上げられた、われらの母なる聖母を仰ぎ見ることをもその構図の中に収めています。「天のきさき、天の門、海の星と輝きます」というわたしたちにとって慣れ親しんだ聖歌も、天の栄光に上げられた聖母を仰ぎ見る、地上に残されたわたしたちの心情を歌っています。カトリック聖歌集の中で最もポピュラーなこの聖歌の一番の歌詞は、これもよく歌われたラテン語のサルヴェ・レジーナの聖歌にそのインスピレーションを受けているように思えます。

「元后、あわれみの母、われらのいのち、喜び、希望。旅路からあなたに叫ぶエバの子、嘆きながら、泣きながらも、涙の谷にあなたを慕う。われらのために執り成す方、あわれみの目をわれらに注ぎ、尊いあなたの子イエスを、旅路の果てに示してください。おお、いつくしみ、恵みあふれる、喜びのおとめマリア」。元后という、耳慣れない、聖母への呼びかけは「天のきさき」と言う呼びかけと同じ意味の表現です。天の御父の右の座につかれた全てのものの王である神の子キリストの母として、聖母は被昇天の神秘によって、今や御父と御子とともに天の栄光のうちにおられるのです。その聖母を仰ぎ見ながら、わたしたちは天のきさきと呼びかけ、そのあわれみを呼び求めるのです。なぜならわたしたちはみな、エワの子らとして、罪あるものとして、樂園を追われ、この涙の谷である追放の地に生きる者たちだからです。そのような者たちとして、わたしたちはこの苦しみに満ちた地上の生活の中であって、涙と嘆息のうちに慰めと希望と喜びを求めて、暗い夜の波間に行く舟人が天の星を仰ぎ見るようにして、天のきさきであり、われらの母なる聖母のあわれみのまなざしを慕い求めるのです。

このような祈りは、この世の生に対してあまりにも悲観主義的でありすぎるように感じられるかもしれません。現実逃避の来世願望と思われるかもしれません。しかし、聖母へのこのような祈りを口伝えに伝えてきたわたしたちの信仰の先輩の多くは住みなれた土地を追われ、隠れるように棲みついた五島の海にわずかな生活の資を求めざるを得なかった漁師のような人々であったことを思わずにられません。働いても、働いても、年貢と借財に苦しむ生活を送っ

た人々であることを思わざるを得ません。このような祈りと歌は、今日を生き抜くために生活の糧を求めて荒海に乗り出し、不毛の土地を耕した人々の唱え、歌い伝えた祈りの歌であること忘れてはなりません。そのような人たちが生きることへの不屈の意志の中で知らざるを得なかったことは、エワの子らとして生きる者たちに負わされたこの世の生の苦しみと悲しみです。

今は歌われることの少なくなったカトリック聖歌集に収められている、哀調を帯びた聖母マリアに対する聖歌の多くはこのような人の世の苦しみと悲しみを救い上げてきました。カトリックの長い伝統の中で、聖母マリアは常にその御子であるイエスの傍らにあって、この世の生を生きるわたしたちの人間としての根源的な悲しみを受け止め、慰めと希望を与えてくださるわれらの母なるお方でした。

わたしたちが母を必要とするのは、特に人生の齢を重ねたわたしたちが心の母を必要とするのは、わたしたちが生きてきた人の世の苦しみ、悲しみを知る者たちだからです。人の世の苦しみ、悲しみを真に知ることなしに、感じ取ることなしに、わたしたちの中に真の平和への願いも、天への憧れも育つことのないことを、これも悲しみのうちに知らなければなりません。今日祝う天のきさきである聖母がわたしたちの悲しみを知ってくださり、母としての慰めを与えてくださいますように。そしてまた、わたしたちは皆、聖母の与えてくださる慰めを必要としている、幼子に過ぎない者たちであることを自覚することが出来ますように。わたしたち若い者たち同士がお互いに我を張り通して争いあうことを、深い悲しみのまなざしで見つめてこられたわれらの母なる聖母のもとに馳せ戻って、その膝元で真の安らぎを味わうことができるように祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高